2024 年
（令和 6 年）
10 月 10 日

むつび

石井十次の会　会報

325 号

令和６年度　西都市立茶臼原小学校の紹介

西都市立茶臼原小学校　校長　長友　裕之

令和６年度で、本校は創立７８年を迎えます。今年度の児童数・職員数は、下記の表のようになっています。

児童数・職員数について　　令和６年９月１日現在

学年	１	２	３	４	５	６	計
男子	５	１	１	２	５	３	１７
女子	１	２	３	５	３	３	１７
計	６	３	４	７	８	６	３４

校長・教頭・教諭５名・養護教諭・臨時職員３名・事務職員２名　計１３名

＊３４名中１１名が友愛社から通学している。

今回、このような機会をいただきましたので、この紙面をおかりして、本校で取り組んでいる代表的な２つのことをご紹介いたします。

まず、１つ目は、聞き合える関係作りです。

義務教育の最大の目的は、「自立」です。

本校では、この「自立」を「自立とは、人のせいにしないこと」と、１年生の子どもたちにもわかる言葉で説明しています。

さらに、「自立するには、依存すること」つまり、周りの友だちに「ねぇ～、教えて」とか、「だれか、助けて」と恥ずかしがらずに聞ける・言えるようになることと、子どもたちに言って（説明して）います。

学校で過ごす時間の多くは、授業の時間になります。「勉強の内容で、分からないことがあったらどんどん周りの子に聞いてね。」って子どもたちにお願いしています。

繰り返しになりますが、学校では（特に授業では）、困ったとき、「わからない」「教えて」の二語が言える子どもたちを育てることに重きをおいています。つまり、依存です。

これは、子どもを集団の中から孤立させないためのものです。１人で考えるには限界があります。それよりも、友だちに依存したり、子ども同士で学び合ったりする経験を積み重ねていくことが重要です。

周りの子に聞くという行為は、なかなか勇気のいることです。勉強においてはなおさらです。私たち教師はそこを支援し、頑張って聞くように促し、子どもと子どもを繋いでいきます。しかし、一朝一夕にできるものではありません。毎日、繰り返し繰り返し聞けるよう支援（聞き合える関係作り）をしています。

その先に、遠慮無く聞けるようになり、自分自身、人に弱みを見せられるようになります。そうなると、すべての子どもとつながりができるようになり、教室、学校全体が柔らかな雰囲気になっていくと信じて取り組んでいるところです。

２つ目は、「自立」を促す３つの言葉かけです。

「どうしたの？」「どうしたいの？」「〇〇のようなことなら手伝えるけど」の３つになります。この言葉かけについては、我々職員のみならず、保護者の皆様にもお願いしているところです。よかれと思い先を読み支援することがケアをすると思っていました。しかし、それでは社会で通用しないことは明らかです。

小学生のうちから、きちんと自分の考えをアウトプットさせ、そして、自分なりに判断してやってみることが「自立」を促していくことになります。うまくいかなかったり、失敗したりしたときには、大人はそのことを責めるのではなく、どうすればよかったのかを一緒に考えることが大事と考えます。

この３つの言葉かけによって、子どもたちは、自己肯定感、自己有用感を高めていくことになります。

本校では、この「聞き合える関係作り」と「自立を促す言葉かけ」を、６年間で、ゆっくり、たっぷり学ばせています。

お母さん業

石井十次の会　西都支部事務局長　福島　博子

三人兄弟の末っ子（二女）が中学生になり、お母さん業がずいぶん楽になってきたなぁと感じた六年前、子どもの電話相談を受けるボランティアを始めた。きっかけは、輝きを放ってこの世に誕生したはずの子ども達の未来が、様々な背景で奪われる事故や事件のあまりの多さに対する憤りと焦燥感からだった。

ちょうど同時期に職場で「ゆうあい通信」を拝読するようになり、中でも友愛園の子ども達が記した作文にはいつも心を動かされ、仕事中によく鼻をすすっている。相信・相愛の方針の下、自律を目指す子どもたちの言葉に息吹を感じ、生き抜く力強さを感じさせられる。

西都市に生まれ育ったのに、石井十次のことも知っているのに、友愛園を訪ねたことが一度もなかったことを後ろめたく感じ、二年前に二女と伺い自然豊かな敷地内を散策しながら十次の描いた思想や理念に思いを巡らせた。小さく愛しい我が子を託していった母達の英断にも。ここで一体どれほどの尊い生命が救われ、巣立っていっただろう・・・。もっと関わり、子どもを取り巻く環境や支援について勉強したいと思い、会員になった。

そんなある日「お母さん達がいなかったら、きっと私もおかしくなっていたと思う。」若くして幼子を道連れに人生に終止符を打ってしまった女性の悲しいニュースを見て、ぼそっと長女が呟いた。

３歳と１歳の子育て奮闘中の長女夫婦。娘が仕事に復帰し、ますます日常が慌ただしくなってきて、本当に大変そうだ。私も二女もできるだけサポートを、と心掛けているが、自分たちの仕事や学校もあり、支援は限られる。

それでも、子育て中の母親にとって、一人になれる時間が確保できる環境に身を置けるのは、とても恵まれていると思う。私自身も両親にはかなりお世話になってきた。誰かに頼れる、甘えられる環境はありがたいし大切だと思う。母親にとっても、幼い子にとっても。

「こどもまんなか社会」の実現に向けて進む中、安心して子育てを、とかなり手厚いサービスが受けられるが、精神的な支援も同様に、いや特に重要だと思う。母親が一息つける場所、心の拠り所や気軽に相談できる環境整備の必要性を強く感じる。

連綿と続いてきた出産と育児。母親だけの力では決してここまで続いてはいない。まわりの様々なサポートあってこそ受け継がれる命のバトンだと思う。

しばらくは忙しいお母さん業が続く娘だが、母親としてだけでなく、一人の女性としても、自分の人生を豊かに歩んで行って欲しいと願っている。

娘たちのお母さん業のロールモデルになるのが、私の目標である。

なつかしい「うたのおばさん」の思い出

ラジオはいつでもどこでも、何かをしながらでも聞く事ができる。公務員を退職した後、夫と一緒に西米良に向け車を運転しながらラジオに耳を傾ける。道中、ラジオから届くニュースや世界各地の話題、音楽などは非常に興味深い。私と夫との会話も弾む。私たちにとっては、学びも多く大事にしたい時間帯である。

ところで、ラジオ番組といえば、小さい頃よく聞いた「うたのおばさん」の歌が思い出される。私が通う分校（東米良村立中尾小学校猪之原分校）の拡声器から「うたのおばさん」の優しい歌声が流れてきた。「あのまちこのまち」や「ゆりかごのうた」、「みかんの花咲く丘」など。中でも「朝はどこから」は私の耳にはっきりと残っている一曲だ。歌詞は次のとおり（一番のみ）。

「朝はどこから」　　作詞：森まさる　作曲：橋本国彦

♪朝はどこから来るかしら　　あの空超えて雲超えて
光の国から来るかしら　　いえいえそうではありませぬ
それは希望の家庭から　　朝が来る来る朝が来る
「お早う」　「お早う」

あれは昭和３６年のこと。当時分校に入学した私たちは、険しい下り坂を１．５㎞ほど駆け下り、今度は２㎞もある急な坂をのぼりきり、後は平坦とは言えない道をひたすら歩く。４０～５０分歩いてようやく分校の屋根が見える辺りまで来ると、決まって「うたのおばさん」の明るく優しい歌が聞こえてくる。「あっ、急がんといかん。」分校へと足を速める。始業時間ぎりぎりに登校していた１年生の私たちにとって、毎朝、拡声器から流れてくるこれらの歌はとてもありがたかった。懐かしい一コマである。

これからもラジオから届くあらゆる情報に耳を傾け、楽しく明るい生活の糧にしたい。

（編集委員　　黒木　三鶴）

方舟館からのお知らせ

明治末期、岡山から移築され、石井記念友愛社の敷地内に立つ方舟館。現在は石井十次資料館の案内窓口、また、石井十次の会事務局として使われています。

★新規会員のご紹介

【延岡市】松田 宗史　【高原町】郡山 登喜子　河原 恵美　外村 仁　郡山 貞利
【鹿児島県】福元 佑弥

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【都城市】本郷 貞雄　【高鍋町他】財津家いとこ会

ここまでの掲載者は編集等の都合により９月25日までのものとしています。

★次回の通信発送作業は　11月13日（水）14日（木）いずれも9時からです。
お手伝いいただける方は　0983−32−4612　までお電話ください。

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。
〒 884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1
社会福祉法人　石井記念友愛社後援会
石井十次の会
TEL/FAX　0983-32-4612

編集後記

巻頭は茶臼原小学校校長 長友裕之様に玉稿をいただきました。ありがとうございました。茶臼原小学校の取組により、学校全体が柔らかな雰囲気になることをお祈りしています。

（編集委員 黒木 三鶴）